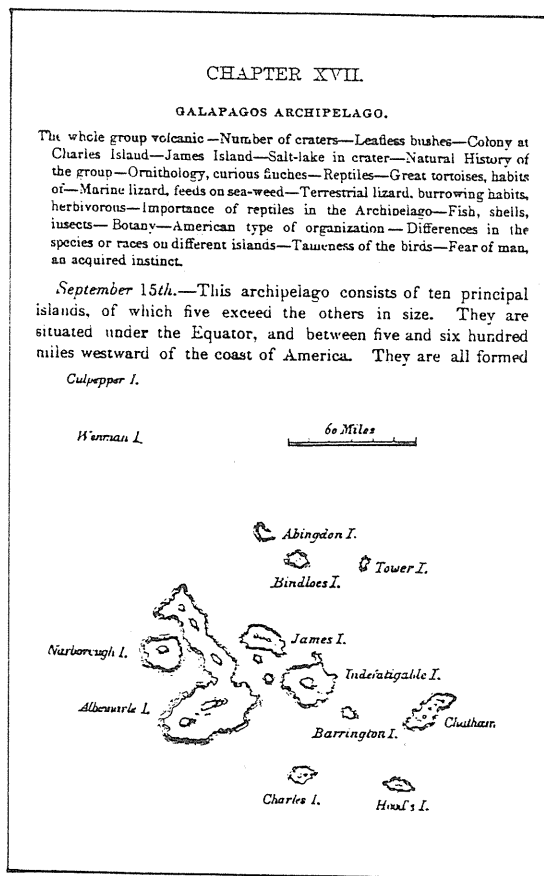




イギリス海軍の測量艦ビーグル号に乗っていたダーウィンが太平洋に浮かぶガラパゴス群島に到着したのは、1835年9月15日のことであった。上図は『航海記 Journal of Researches』中のその日の記述である。ガラパゴス群島に棲む生物が若き学者ダーウィンにいかに決定的な影響を与えたかは、あらためて述べるまでもない。彼の没後百年(1982年)を迎え、ネオ・ダーウィニズムをめぐる議論はますます活発である。教養図書館は、理科系総合大学に求められる専門的な事典・辞書などの二次資料の充実、および著作集などの一次文献の整備に努めているが、この『ダーウィン全集 The Works of C. Darwin』(全18巻、AMS社、当館請求記号467.5/D42)もその一環として収書された。なお、邦訳としては『ダーウィン全集』(昭和13年～、白揚社、467.5/D42a)がある。当館に対しては神奈川県より長年にわたり私立大学等図書館補助金が交付されており、その昭和58年度分がこの一次文献の購入にあてられた。

●総記

としょかんサービスこれからの課題

日本図書館協会編 1984 015/N71

●哲学

構造と力—記号論を超えて— 浅田彰著

勁草書房 1984 116.3/A81

憑霊とシャーマン—宗教人類学ノート—

佐々木宏幹著

東京大学出版会 1983 163.9/Sa 75

日本人は知らなさをすぎる聖書の常識 山本七

平著 講談社 1984 193.04/Y31

●社会科学

メディアの牢獄—コンピューター化社会に未来はあるか— 粉川哲夫著

晶文社 1984 361.54/Ko 25

●自然科学

インタープレス科学技術25万語大辞典 全2巻

インタープレス 1983 R403.3/I57/1-2

インタープレス科学技術活用大辞典 全2巻
1983 R403.3/I57a/1-2

生化学辞典 宇井信生(等)編

東京化学同人 1984 R464.03/Se 17a

常微分方程式例題演題 杉山昌平著

森北出版 1983 413.62/Su 49

化学を楽しくする5分間 日本化学会編

化学同人 1984 432.1/N71a

●工学

新素材・先端材料のすすめ(上・下) 山本良

一他著 培風館 1984 501.4/Sh69/1-2

●芸術・体育・スポーツ・音楽

アイコンの記号学—中世の絵を読むために—

ボリス・ウスペンスキー著

新時代社 1983 702.099/U94

パリ物語 宝木範義著

新潮社 1984 702.35/Ta 51

美しきものへの思慕 矢代幸雄著

岩波書店 1984 704/Y61

●語学

時代別国語大辞典 上代編 上代語辞典編修
委員会編 三省堂 1967 R813.1/J48

英語のジョーク・笑いの構造 城戸保男著

朝日イブニングニュース社 1983 837/

Ki 13

デンマーク語の入門 秦 宏一著

白水社 1984 849.7/J52

チェコ語の入門 千野栄一著

白水社 1983 889.5/C47

バスク語入門—言語・民族・文化— 下宮忠

雄著 大修館書店 1982 893.5/Sh53

●文学

イメージ・シンボル事典 アト・ド・フリー
ス著

大修館書店 1984 R903.4/V96/C.2

日本古典文学大辞典 全6 古典文学辞典編
集委員会編

岩波書店 1983 R910.3/N71/1-6

フィッツジェラルドとヘミングウェイ失敗
の権威と成功の権威— M.J. ブルッコリ著

あぼろん社 1983 930.28/B78

マラルメ論 J.P. サルトル著

中央公論社 1983 950.28/Ma 39

The Oxford Companion to French Literature
Sir Paul Harvey, J. E. Heseltine

Clarendon Press 1983 R950.3/O93

The Oxford Companion to Spanish Literature
Philip Ward

Clarendon Press 1978 R960.3/W38

●新書

かたちの不思議 高木隆司著

講談社 1984 現代新書741

フランス式エリート育成法—ENA 留学記—
八幡和郎著

中央公論社 1984 中公新書725

子どもの思考力 滝沢武久著

岩波書店 1984 岩波新書270

ごみと都市生活—環境アセスメントをめぐっ
て— 吉村 功著

岩波書店 1984 岩波新書271

日本の山100 川口邦雄著

講談社 1984 現代新書739

『モーツァルト』 高橋英郎著 講談社

(講談社現代新書710)

部屋に閉じこもりがちな季節になりました。丹沢山塊にまっかな夕陽が、まるで転げこむように隠れ、残照の中で部屋いっばいに響くグレゴリオ聖歌。そうそう今日は金曜日、賛歌「おお祝祭の日」をかけましょう。

この季節をたっぷり満喫していただくために最近図書館に入った本の中から気軽に読める音楽書『モーツァルト』をご紹介します。18世紀には、今日ほどの興味を持たれていなかったモーツァルトは、現在多くの人々に愛されています。そのモーツァルトと共に青春を生き、とことんのめり込んでいるモーツァルティアンが書いた本です。第Ⅰ部「ミューズの子・モーツァルト」では、著者とモーツァルトとの出会いから旅人モーツァルトの歩いた後を辿り、当時のきびしかった旅を思い、エピソードを交えながら様々な角度からモーツァルトを描いています。第Ⅱ部では〈人間モーツァルト〉はまったく〈あまりにも人間的〉であったと言われるにふさわしく「人間の歌・モーツァルト」としていくつかの彼の作品について書かれています。本書の最後に著者の選んだモーツァルト150選がリストされています。「モーツァルト」を読んだ後に聴く「モーツァルト」は、一段と味のあることと思います。また興味がある方は、最近ロンドンにブームを巻きおこしそれがアメリカへ飛び火し、日本にも今年春には来日して話題を呼んだ、古楽器を使っのての18世紀当時そのまの型式の演奏を聴くチャンスがあれば、時代を遡ってまた別のモーツァルトを堪能することができるかもしれません。

知的疲労のあと、少し濃い目のコーヒーをすすりながらモーツァルトを聴けば、心がなごみます。あなたもこの本を読んでモーツァルティアンになってみませんか。

『ああダンプ街道』 佐久間充著 岩波書店

(岩波新書黄版266)

生活用水、工場等による水質汚染、大気汚染、住宅密集地の騒音公害等今日様々な危険にとりまかれながら生活していますが、ダンプ公害もその一つです。ダンプ公害に関する資料・研究論文がほとんどないなかで、これは若い研究者が体あたりで告発した書です。砂や砂利・碎石などのいわゆる骨材は、水に次いで多量に必要とされる資源だと言われています。海を埋めためて、コンクリートジャングルを作り、道路が伸びてゆく。全国にある砂や砂利の採取場7,000ヶ所からのダンプカーによる山砂の供給がなかったら、今日の首都圏における輝かしいコンクリート文明はこれほどスムーズに展開しなかったにちがいません。夜昼となくダンプカーが砂ぼこりを巻き上げ家をゆすって走りすぎてゆく、開発という魔力、この犠牲となっている地域住民の怒り、ダンプカー運転手達が車の借金返済におわれ、低賃金をカバーするために早朝から深夜まで疾走しなければならない実情。本書は、ダンプ公害による直接的被害を明らかにして人間不在の「開発、やとりかえしのつかない自然破壊を許している行政にメスを入れるべきと、実態調査にもとづいて告発しています。

「京大西洋史」

手塚 甫

目の中の鱗が落ちるような思いをさせてくれた本、物の見方がすっかり変ってしまうほどの強いショックを受けた本、あるいは、内容よりもある人への思い出にまつわるような本。そうした本が誰にでもあるように、読書家とはとても言えない僕にも、すぐに頭に浮んで来る忘れられない本がいくつかある。そのような本を語ることは、結局語る本人を裸にして見せるようなもので、とても躊躇を感じるが、敢てここでは、自己紹介のつもりでその一つの本をめぐる思い出を書いてみようと思う。

高校二年の社会科に、僕は世界史を選択した。担任は枅本先生。その年の三月に大学を出たばかりの先生であった。色の白い、体は大きく、がっしりと、だがスポーツマンタイプとは言えない、いが栗頭の先生であった。教室での先生は、顔を少し上向き加減に、視線を遠くに据えて話した。その、どことなくはにかんだ態度がいかにも初々しかった。我々が質問すると、その白い顔を少し紅潮させ、丹念に、心をこめて答えてくれた。先生の誠意ある態度に、我々はすぐに好感を持った。が、一時間一時間、そんな風に先生は丹念に授業するので、規定の時間内に予定をこなせそうになくなった。そうすると担当の全クラスの生徒を放課後図書館に集めて講義を補った。先生は勿論大変だったに違いないが、生徒の方もサボる者はいなかった。自ずと試験の時にも西洋史は他の科目よりも力が入った。教科書、ノートは勿論、普通の参考書でもとても物足りない、何かもっといい本はないかと思った。これは、いい点を取りたいから、というよりは、枅本先生の誠意に我々も

何とか応えようと思ったから、と言う方が当たっているように思う。同じ想いの者が他にも居て、茶色っぽい、大きさも厚さも教科書と同じような、見馴れない本を読んでいるのが居た。聞くと、創元社の「京大西洋史」だと言う。彼が読んでいたのは、丁度試験の範囲にあたる第4巻『ルネサンスと宗教改革』で、著者は会田雄次、当時は神戸大学の助教授だった。面白そうだったので躊躇わずこの本を買った。なるほど面白い、が、それだけではなかった。ここに描写された歴史の流れ、封建的な束縛から人間が次第に解放されて行く、そのうねりが生き生きと描かれているように思え、思わず引きこまれるように読み進んだ。いつの間にか試験のことも忘れ、その巻を読みおえると、すぐにその続きが読みたくなった。そして第5巻『絶対主義の時代』第6巻『自由主義と民族主義』も一気に読み通してしまった。歴史書をこんな風に読んだことはこの時がはじめてだった。歴史は面白い、こんな風に歴史が理解出来るなら、今日を如何に生きるかも自ら歴史から答えが出て来るはずだ、歴史こそ学問の中の学問、歴史を知らずして何をかいわんや…今にして思うと、あまりに短絡的な、少年の日の一方的思いこみだと笑えもしようが、この時の思いは、こんな言い方でもまだ物足りない、歴史が燦然と輝いて見えた。歴史しか見えなくなったと言っていい。大学で歴史をやろう、と一も二もなく決めた。そろそろ大学の進路を決める時期でもあった。どういう訳か父はてっきり僕が理科系へ進むものと思いこんでいたらしい。歴史をやりたいと言い出した時には、とても驚き、反対した。歴史をやっては食って

行けない、と言う事が父の言い分であった。若い頃から金銭的な苦勞を嘗めたらしい父としては当然の言い分だが、当時、そういう言い方が不潔に思え、金だけが人生ではあるまい、と氣負った。母はこちらの言い分を理解してくれたようであったが、間に立って手をこまねくだけだった。結局、先生が間に入って、父を説得してくれた。

大学に入ってからのは、今は省く。ただ「歴史」がもっていたあの輝きが褪せていくばかりだったと言うに留める。

所で、あの時の、あの歴史への思い込みは一体何であったのだろうか。「京大西洋史」を今の高校生が読んだとしても、あんな想いはすまい。結局、あの時が、あの時の高校生活がそれを育んだのだとしか思えない。

あの頃の高校は、今とは大分違っていった。まず、凡そ規則らしい規則がない。いや、あったのだろうが、それを意識することがなかった。制服は勿論ない。学園祭、運動会も生徒会が中心で、先生は生徒の相談に与る以外はタッチしなかった。遠足も日取りだけが決っていて、どこへ、どのように行くかは、全てクラスごとの判断に任されていた。それだけではない。授業でも先生はよく脱線し、時事問題について数学や国語の先生が自分の意見を卒直に話すということも屢々だった。朝鮮戦争のこと、サンフランシスコ講和会議のこと、第5福竜丸のこと等々。当時は、戦後の、まだ揺れ動いている時期で、日本がどちらに向って進んで行くのか、その方向もまだ定まっていなかった。そういう中で我々はその方向づけに自分達も責任があるような気がして、先生達の話に刺激を受けるだけでなく、仲間うちでも話題を拾って熱心に論じ合う、ということがよくあった。我々の学校は公立の受験校と世間では思われていたようだったが、受験勉強に追われた思い出はない。どうしてそういう空気があったのか、今にして思うと不思議な気さえするが、それは、

我々の学校だけのことではなく、時代の空気とも言うべきものだったように思う。我々は、時の流れのまゝに身を委ねているだけではない、小さくとも主体的に時代に働きかけて行かねばならぬと思わせる共通の体験があった。その例を、今一つだけ挙げる。我々は戦争が終った時、小学生、いや国民学校の学童であった。終戦を境にした変りようを、それなりに見ていた。国民学校に入学して間もなく、担任の若い女の先生は、天皇は神である、天皇の支配する日本は、だから神の国であると教えた。やがて戦争に敗れ、マッカーサーに率いられて占領軍がやって来ると、その同じ先生の口から「天皇は神ではなく、ただの人間に過ぎません」と言われた。その時に抱いたひっかかるような気持ちを今も忘れない。やっぱり人間か、その方が納得できる、と思いつつ、でも先生は何故「天皇は神だ」と以前我々に教えたのだろう。「天皇は生き神様です」と言う話に、そんなことあるのかな、と幼いながら心の隅にこだわりを残しながら、でも先生の言うことだから正しいのだろうと自分を納得させていたのだった。そのひっかかるような想いを今もはっきり思い出す。そして矛盾した話を同じ先生の口から聞かされたこともさることながら、それを言った、あの時の先生の躊躇のなさが、更にひっかかる。あの時、あの先生はどういう思いだったのだろうか、どうして躊躇なく言えたのだろうか、或いは逆に、躊躇らう心を振り切った上でのためらいのなさだったのだろうか、と。教職にある今、以前にも増してそれにこだわりつづけている。

あの時の根本先生を、高校生活を、あの時我々を取りまいていた空気を、そして、あの時の自分の新鮮な歴史への想いを思い起させてくれる「京大西洋史」とは、僕にとって、そういう本である。

(社会学)

宗教・倫理思想の 「専門百科事典」

古来われわれの思索や行動にとって「死」がいかに強い導き手の役割をはたしてきたかは、あらためて言うまでもない。たとえば、「死」がわれわれのたどりつく無明の闇の終着点なのか、あるいは逆に「生」という明るい舞台をうかびあがらせる照明なのか—そう考えてみただけでもわれわれは思索の最も原初的な場所に身をおくことになる。「生命科学」が脚光を浴びる現在ともなれば、「死」をどのようにとらえるのかという思想上の要請も新たな局面を迎えているといえよう。

このような問題意識を持ったときにそれを発展させてゆく最も有効な方法は、「百科事典」の活用である。知の集大成としての百科事典は、近代においてはフランスのディドロによる『百科全書—科学、芸術および技術に関する理論事典』(1751-1772)の刊行を機に、以後英国の『ブリタニカ』(1768)、ドイツの『 Brockhaus 』(1772)、フランスの『ラルース』(1866)と受けつがれ、思想の世界にゆるぎない地位を確立した。こうした著名な外国の百科事典をはじめ、わが国のさまざまな百科事典は、教養図書館内においても中心的な位置を与えられ、有効に利用されている。とはいえ、たとえば「死」の項目を検索してみればわかることだが、これらの大百科事典が必ずしもいつも有用とは限らない。紀田順一郎はこう書いている、「少年時代から約30年にわたって内外各種の百科事典をどれほど利用したかしのれない。いわば米の飯のようなものである。必需品だが、見かけほどでもない。しかもこれだけでは栄養にならない」(『本の環境学』、出版ニュース社、昭和50年)。こうした批判は、不当ではない。とくに利用者が、ある事項の概観的知識ではなく、その研究史、

思想史にまでたち入って考えてみようとするれば、あるいは個々の単行研究書に眼を通したうえでさらに展望を試みようとするれば、なおさら「栄養になる」事典が求められる。ではそんな理想的なものはないかというと、実はそうでもない。

このような要望に答えるのが本来は、「専門事典」である。ところがわが国におけるこの種の事典は、小事典であり、もしくは小事典を大きくした域を出ていない。たとえば、わが国では初めて宗教学領域の事典として刊行され、高い評価をえている『宗教学辞典』(小口偉一、堀一郎監修、東大出版会、1973年、当館請求記号161.03/Sh 99)もそうである。すぐれた事典とはいえ、「生と死」の項目をみれば約5頁の記述に、3点の参考文献をあげるにとどまる。

ところがヨーロッパやアメリカでは今世紀初めから「専門領域の百科事典」ともいうべき巨大な事典が、その専門学界の総力をあげて編集され、刊行されてきた。こうした専門事典を何と呼ぶかは、わが国にそうした出版物がないこともあって確立していないけれどもここでは「専門百科事典」と呼ぶことにしたい。以下にあげる3点は、宗教学におけるその代表的なものである。専門の研究者が研究上の武器とし、また一般の人々も多大な啓発をえている事典だが、わが国ではまだよく使いこなされていない。

『宗教・倫理学百科事典 Encyclopaedia of Religion and Ethics』(全13巻、請求記号160.3/E 58)、『宗教歴史事典 Religion in Geschichte und Gegenwart』(全7巻、160.3/R 25)、『神学・教会事典 Lexikon für Theologie und Kirche』(全11巻、190.3/L 59)で、一般に略称 ERE、RGG、LTK と呼ばれている。宗教学というと特殊な領域に考えられるかもしれないが、「死」の問題にも明らかに、これらの事典は同時に貴重な思想史事典にほかならない。

レファレンス・サービス——「安楽死」

「安楽死」のもともとの意味は、麻薬の注射
その他相当な方法によって死期を早めること
なく瀕死の傷病者が苦痛に悩んでいるときに、
その苦痛を緩和、除去することであり、これ
は法律上何ら問題となるものではない。これ
に反して、その方法の施用が死期を早めると
きは一応、殺人罪ないし嘱託殺人罪を構成す
るものと認められる。この種の場合にいかな
る要件のもとに安楽死が罪とならないか、換
言すれば、どこに安楽死の合法性の限界が求
められるべきかが安楽死の中心問題である。
戦後、日本でも安楽死事件が相次いで起って
いるが我々に最も印象的であったのは、¹カ
レン・アン²の名前で世界中が注目した1975
年の「カレン・アン事件」ではないだろうか。

安楽死文献はそれを裏付けるかのように
1975年を境におびたく出版されている。

もとより人間の死が、裁判所の判決で解決
するはずもなく、宗教、倫理、道徳、法律、
医学とさまざまな立場からその当否が争われ
てきたことは当然のことでもある。

さて、当図書館に所蔵する安楽死文献もそ
の苦悩を裏書きするように、その主題は道徳、
刑法、医学と多領域にわたり一つの分類番号
に集中させることは困難であり、また、その
資料の性格上主題が分散することはいたしか
たないことでもある。資料の分散をカバーし
て検索を助けるのが件名目録である。その意
味から当館では安楽死と公害関係の資料につ
いては主題から探せるように目録を作ってい
る。以下に紹介するのはその一部である。紙
数の都合上、単行書に限るが、目録には雑誌
もありますので関心のある方は一度、主題文
献目録「安楽死」をひいてみて下さい。

安楽死の論理と倫理 宮川俊行著

東京大学出版会 1979 158/Mi 76

死を選ぶ権利 M. D. ハイフェッツ他著

金沢文庫 1976 326.23/H 51

安楽死一人間に「死ぬ権利」はあるか 宮野
彬著

日本経済新聞社

1976 326.23/Mi 79

安楽死とは何か 日本安楽死協会編

三一書房 1977 490.15/N 71

安楽死論集 第1集—日本安楽死協会編

人間の科学社

1979 490.15/N 71/1-

人間の威厳について 松田道雄著

筑摩書房 1975 490.4/Ma 74

生きる権利・死ぬ権利 鯖田豊之著

新潮社 1976 490.4/Sa 11

カレン・アンの永い眠り P. Battelle 著

講談社 1979 936/B 27

メアリーは死んだ R. J. グラーサー著

文化放送 1975 936/G 48

ある安楽死事件の記録 P. ミッチェル著

佑学社 1977 936/Mi 59

安楽死—愛は死をみつめて— L. T. ワーテ
ンベーカー著

講談社 1974 936/W 59

安楽死関係の寄贈図書は次頁を参照のこと。

■寄贈図書の紹介（「安楽死」関係）

- 人間の死に方 島影 盟著 白揚社 1978
 分裂病入門 シルヴァーノ・アリエティ著
 星和書店 1982
 カレン・生と死 B. D. コーレン著
 二見書房 1979
 続死ぬ瞬間 E. キューブラー・ロス著
 読売新聞社 1981
 定められたその時刻まで 原勝著
 新潮社 1980
 ジーンの選んだ死 デレック・ハンフリー
 & アン・ウィケット共著 サンリオ 1979
 これからの生と死 藤田真一著
 朝日新聞社 1980
 死について アーノルド・トインビー著
 筑摩書房 1979
 医の倫理 村上国男著
 農山漁村文化協会 1979
 戦中派の死生観 吉田 満著
 文芸春秋 1980
 死の看護 リチャード・ラマートン著
 メヂカルフレンド社 1981
 精神分析読本 大橋秀夫著
 サイエンス社 1981
 生と死を支える 柏木哲夫著
 朝日新聞社 1983
 生きてん母ちゃん 小学館 1980
 生きる なだいなだ等編 平凡社 1980
 奇跡の生還 佐藤正忠著 経済界 1980
 生きるなり 千秋 実著 文芸春秋 1980
 安楽死 阿南成一著 弘文堂 1980
 人間は死んだらこうなるだろう 岡部金治郎
 著 第三文明社 1979
 医家のための新・医事紛争のすべて 高田利
 廣著 メジカルビュー社 1980
 植物人間の記録 藤田真一著
 朝日新聞社 1977
 ガンの征服される日 水野 肇著
 鎌倉書房 1978
 生体解剖 上坂冬子著 毎日新聞社 1980

■冬休み中のお知らせ

- 1) 長期貸出
 貸出期間 12/12(水)～1/16(木)
 冊数制限はありません。(但し雑誌は通
 常の貸出です)
- 2) 開館時間
 12/20(木)～12/27(木) 蔵書の点検のため
 閉館
 12/28(金)～1/5(土) 年末年始のため閉館
 1/7(月)～1/8(火) 9時から5時まで
 1/9(水)～ 9時から6時まで

■後期試験に備えて

- 1) 開館延長
 1/19(土)・1/26(土)は午後3時まで開館し
 ます。
 但し1/12(土)は入試準備のため、閉館し
 ます。
- 2) 一部図書の貸出期限変更について
 予約の多いものに限り、一夜貸し、三日
 貸し等の措置をとることがありますので
 御承知下さい。

■雑誌係より

新規購入

「I/O」 工学社（マイコン関係の情報誌）
 「アクアライフ」 マリン企画（水生生物情
 報誌）
 1985年1月号から（月刊誌）。

休刊

「自然」 中央公論社
 昭和59年5月号で。
 「RAM」 廣済堂出版
 昭和59年9月号で。
 「歴史と人物」 中央公論社
 昭和59年12月号で。

閲覧ニュース44号

1984. 12 発行

北里大学教養図書館

発行責任者 吾妻寛治

〒228 相模原市北里1-15-1